

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：20105

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22592378

研究課題名（和文） 看護基礎教育と看護師の臨床教育をつなぐ客観的臨床能力試験プログラムの開発

研究課題名（英文） Development of teaching method using Objective Structured Clinical Examinations which aim to connect academy to clinical nursing training.

研究代表者

樋之津 淳子（HINOTSU ATSUKO）

札幌市立大学・看護学部・教授

研究者番号：90230656

研究成果の概要（和文）：卒業後 1、2 年目の看護師が感じている課題は、「新しい就業環境、人間関係への適応」、「ストレスコントロール力」などで、「職場のメンタルヘルス」の研修が効果的であった。卒業後 3 年目は専門看護師などキャリア開発に向けた研修のニーズが高かった。一方、新人指導看護師が大学に期待することは、社会的スキルを含めた職場適応力や精神面の支援だった。卒業後最低 3 年間は大学と就業先が協働して研修体制を充実させることが重要である。

研究成果の概要（英文）：In this study, the beginner nurse have any tasks as follows, new environment of nursing, adaptation of human relationship, control of stress management. We found that a seminar about mental health in working environment was effective for beginner, and three years after graduation, they need to know about career development as a certified nurse specialist. While nurses who educate the new face expected to academy that adaptation to working environment, social skills and mental support. At least after three years graduation, it is found that the benefit of clinical and academy cooperation for the training system for beginner nurses.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護教育学

1. 研究開始当初の背景

看護職に求められる役割や能力に対する社会の期待の高まりにもかかわらず、看護現場で求められる能力と新人看護職員の能力が乖離していることが問題視されていた。医療安全の確保・向上ならびに新人看護職員の早期離職の防止を図るために厚生労働省は 2010 年 4 月、新人看護職員の臨床研修等を

努力義務とした法改正を行った。この制度を推進するために、「新人看護職員研修ガイドライン」が提示され、研修に必要な経費の支援も同時に実施された。一方、看護基礎教育においても、臨床現場とのギャップを最小限にするよう、修得した看護実践能力を客観的に評価することや、演習や実習等で経験した看護実践技術項目を段階別に記録し、可視

化できるようなデータベースの構築に取り組みはじめたところであった。卒業時の学生が修得した技術水準と現場が要求する水準のギャップは具体的にどの程度なのか、本当に新人看護職員の有する実践能力は、本人や周囲が感じているように低いものなのかは明確にされていない。基礎教育と臨床現場のユニフィケーションが重要であると長年叫ばれているながらも実際に協働して教育を実施している施設は一部にとどまっている現状であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大学の看護基礎教育と新人看護職研修を連関し、シームレスな看護職の臨地実践能力育成をめざした教育・研修プログラムを構築することである。われわれが2006年の開学時より実施してきた、学年別客観的臨床能力試験（看護学OSCE）等の実践的な学修を修了し、就業している卒業生が職場においてどのような課題を感じているのか、また彼ら新人職員を指導している看護師はどのように評価しているのかを明らかにし、必要と感じている卒後教育の内容と方法を提示する。さらに新人が中堅、エキスパートに向かうキャリアの形成評価への有用性を検証する。これらの結果は、新人看護職の研修のみならず、看護基礎教育にもフィードバックされ、学士課程で必要とされる看護実践能力の構成要素がより明確になり、教育と臨床現場のギャップを最小限にする方策の1つとなりうる。

3. 研究の方法

2010年度は、卒後1年目の臨床看護師と職場で新人指導を担当している看護師の協力を得て、看護実践能力尺度を用いて質問紙調査とグループインタビューを実施した。

2011年度は、前年度の結果を受けて、卒後1～2年目の臨床看護師の研修と職場で新人指導を担当している看護師のグループインタビューを実施した。

2012年度はこれらの結果をまとめるとともに近隣の病院施設とともにユニフィケーションのあり方についての方策を議論した。

当初予定していた1～3年目の臨床看護師を対象とした客観的臨床能力試験については、2010年の臨床研修が導入されたばかりで臨床現場の準備状態が整備できず、時期尚早であったことと、一方でメンタルヘルスのニーズが予想以上に高かったことにより計画を変更した。

4. 研究成果

2010年度は、新人看護師の看護実践能力の実態と看護実践にどのような問題を抱えているのか、必要とされている研修はどのようなものなのか、など臨床現場のニーズについて調査した。その結果、「患者への心理的な支援を適切に行えている」一方で「情報を多

角的に収集し整理・統合して問題を発見すること」や「症状の緩和などに配慮しながら提供する援助を患者の個別性に合わせる」ことに課題があることが明らかとなった。また、自己の課題として感じていることは、《技術の不足》《知識の不足》《アセスメント力の不足》の3つで8割を超えていた。このような課題を持つ卒業生は自己の課題解決のために大学のキャリア支援を求めており、その内容は《技術やアセスメント力をつけるための研修会の開催》《自己研修のための環境》など、キャリアアップのための再学修の場・実践の改善を試みる場としての役割を期待していた。また、指導看護師が大学に期待することは、新人看護師の精神面の支援についてであった。本結果を教育と臨床現場のギャップを最小限にする方策の1つとし、今後の大学教育・キャリア支援に反映させつつ、引き続きプログラム構築をはかっていくことにした。

2011年度は、新人看護師の看護実践能力の実態と看護実践にどのような問題を抱えているのか、研修プログラムの評価、今後に向けた研修のニーズについて調査した。昨年度明らかになった多くの新人が共通して抱えている課題は、「新しい就業環境、人間関係への適応」、「ストレスコントロール力」などであったことから、今年度は大学卒業後1,2年目の看護師を対象に「職場のメンタルヘルス」などの研修を行った。その結果、講義や研修での振り返りを通して客観的に自己をみつめなおすきっかけができ、その後の就業意欲の復活、再学修の場・実践の改善を試みる場として研修の意義を高く評価していた。また、臨床における指導看護師が大学に期待することは、新人看護師の社会的スキルを含めた職場適応力や精神面の支援についてであった。本結果を教育と臨床現場のギャップを最小限にする方策の1つとし、今後の大学教育・キャリア支援に反映させつつ、引き続きプログラムを再検討し、研修体制を充実させていくことにした。

2012年度は卒業後3年目となった看護師が今後のキャリアをどのような方向に向けてすすめていくのかを考えるきっかけとなるよう、専門看護師、認定看護師、国際協力などさまざまなキャリア開発を実践している方たちとのフォーラムを行った。その結果、講義や研修での振り返りを通して客観的に自己をみつめなおすきっかけができ、その後の就業意欲の復活、再学修の場・実践の改善を試みる場として研修の意義を高く評価していた。また、臨床における指導看護師が大学に期待することは、新人看護師の社会的スキルを含めた職場適応力や精神面の支援についてであった。本結果を教育と臨床現場のギャップを最小限にする方策の1つとし、今

後の大学教育・キャリア支援に反映させつつ、卒業後3年目までは大学での研修体制を就業先と併行して充実させていくことが重要であることがわかった。この成果を受けて近隣病院の教育担当者と定期的に会合をもち、臨床看護師が大学の教育場面を見学する一方で看護教員が病院の新人研修を見学するなど、相互の教育現場を実際に体験することからはじめ、今後はそれぞれの授業(事業)展開を協働で実施するよう、協議しているところである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計10件)

① 櫻井繭子、村松真澄、三上智子、内田雅子、樋之津淳子、中村恵子、卒業後の経験年数による職場適応力と職業適応力の到達状況、第32回日本看護科学学会学術集会(東京)2012年12月1日

② 村松真澄、三上智子、櫻井繭子、内田雅子、樋之津淳子、中村恵子、卒業年別と学年別OSCE及び社会人基礎力、看護者の基本姿勢との関係、第32回日本看護科学学会学術集会(東京)2012年12月1日

③ 三上智子、櫻井繭子、村松真澄、内田雅子、樋之津淳子、中村恵子、A大学卒業生の就労に対する思いの実態と大学に求めるキャリア支援、第32回日本看護科学学会学術集会(東京)2012年11月30日

④ 鶴木恭子、樋之津淳子、宮崎みち子、太田晴美、中村恵子、キャリア教育の体系的支援推進の試み—大学教職員はすべてキャリア支援担当者、日本看護学教育学会第22回学術集会(熊本)2012年8月4日

⑤ 内田雅子、村松真澄、櫻井繭子、三上智子、樋之津淳子、中村恵子、学年別OSCEと卒業時点での「就業力」との関係、第31回日本看護科学学会学術集会(高知)、2011年12月3日

⑥ 三上智子、櫻井繭子、村松真澄、内田雅子、坂東奈穂美、樋之津淳子、中村恵子、A大学卒業生の就業時到達度に対する職場適応力と看護キャリア形成の実態、第31回日本看護科学学会学術集会(高知)、2011年12月3日

⑦ 工藤京子、鶴木恭子、太田晴美、河村奈美子、山本真由美、清水光子、服部裕子、樋之津淳子、中村恵子、看護管理者と指導者からみた新人看護師の看護実践能力と教育側に期待すること、第31回日本看護科学学会学術集会(高知)、2011年12月2日

⑧ 鶴木恭子、太田晴美、河村奈美子、工藤京子、樋之津淳子、中村恵子、S大学卒業生のキャリア発達—卒業後半年の実態調査より

日本看護学教育学会 第21回学術集会(大宮)2011年8月30日

⑨ 大野夏代、清水光子、小坂美智代、内田雅子、樋之津淳子、藤井瑞恵、進藤ゆかり、三上智子、鶴木恭子、宮崎みち子、中村恵子 OSCEにおける学生の認識—参加学生の面接調査より—、第30回日本看護科学学会学術集会(札幌)、2010年12月3日

⑩ 樋之津淳子、坂倉恵美子、宮崎みち子、松浦和代、看護学教育における学年別客観的臨床能力試験(OSCE)の実施と検証、日本看護学教育学会第20回学術集会(大阪)2010年8月1日

[図書] (計1件)

中村恵子、内田雅子、坂倉恵美子、宮崎みち子、松浦和代、樋之津淳子、守村洋、杉田久子、鶴木恭子、佐藤公美子、新納美美、加藤登紀子、保田玲子、菅原美樹、河村奈美子、工藤京子、大野夏代、山本勝則、清水光子、進藤ゆかり、三上智子、藤井瑞恵、大淵一博、太田晴美、多賀昌江、神島滋子、定廣和香子、渡邊由加利、吉川由希子、須田恭子、瀧本雅昭、村松真澄、原井美佳、スーディ K.和代、菊地ひろみ、照井レナ、櫻井繭子、松村寛子、河野總子、星美和子、メヂカルフレンド社、看護OSCE、2011、222

6. 研究組織

(1) 研究代表者

樋之津 淳子 (HINOTSU ATSUKO)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：90230656

(2) 連携研究者

中村 恵子 (NAKAMURA KEIKO)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：70255412
内田 雅子 (UCHIDA MASAKO)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：60326494
坂倉 恵美子 (SAKAKURA EMIKO)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：10292038
松浦 和代 (MATSUURA KAZUYO)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：10161928
宮崎 みち子 (MIYAZAKI MICHIKO)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：70295913
守村 洋 (MORIMURA HIROSHI)
札幌市立大学・看護学部・准教授
研究者番号：50285540
杉田 久子 (SUGITA HISAKO)
札幌市立大学・看護学部・講師

研究者番号：90452995

鶴木 恭子 (TSURUKI KYOKO)

札幌市立大学・看護学部・助手

研究者番号：90452995